伊豆便り

いのちの庭

田島征三

日の出の森のトラスト地に創られた若林奮さんの「緑の森の一角獣坐」が、石原慎太郎都知事（当時）により破壊され、強制収用された痛ましい記憶を共有する一人として、ぼくは自分の生涯の中に若林さんの未完成となった仕事を想うのである。

ぼくは今、作庭の熱をたぎらせている。2013 年瀬戸内国際芸術祭、高松沖に浮かぶ大島でぼくは「青空水族館」を創った。「らい予防法」により、ハンセン病に罹患した人々を、まるで犯罪者のように収監し、閉じ込めた歴史の島に、一見、ちょっと楽しく想い廻らせると悲しみが籠められた水族館。泣く人魚に迎えられ、怒る海賊に見送られて、水族館を出るとそこは「森の小径」。

2019 年、ぼくは「青空水族館」を創った時のように、入所者の方たちがかつて暮らした五軒長家の廊下をつなげて五つの部屋にし、この島で 70 年生きてきた N さんの人生を作品にした。

6 年前は「水族館」と「N さんの人生」の間にあった建物が壊され、廃材が置かれた場所だった。6 年の月日が、黒松、ウバメガシ、トベラ、ヤマモモ、シマトネリコを大きく背高く育てた。中にはイタブ（イヌビワ）やシャシャブ（グミの一種）が実をみのらせている。花を咲かせる植物も何種類か成長している。

ぼくはこの場所に車椅子やストレッチャーで巡る「森の小径」という名の庭を創ろうとしている。

前にもこの欄に書いたが、この庭は敬愛する熊谷守一（モリカズ）さんがご自宅に掘った池が、廻りの都会化により水脈が切られ空っぽになった。その池底に座って空を見上げている守一さんの姿が発想の素になっている。守一さんの見上げる空には池まわりの木々の枝がはり出し、守一さんと空の間に広葉樹の葉が透き通ったり反射したりしてここちよく重なっている。植物は人の命の奥深くを揺すぶる力を持っているようにぼくは思えている。守一さんはアトリエに入る前の数時間、創作の熱を植物からもらっていたのではないか。

流木アーチ
『水族館』から出た正面に創り、森に入って行きたくなるように考えた。

人生を傷つけられ、絶望の中に老いた身を横たえている入所者の方々の生きる力をかきたてることが、植物にはできるのではないか？！ストレッチャーの上に横たわって、この森を巡れば植物が彼らに春や夏の話を聞かせてくれるのではないか？！病の後遺症で盲目になった方は多い。例え視覚が奪われていても、植物たちは彼らに秋や冬の物語をしてくれるに違いない。

だからぼくの作庭は、空にのびた枝葉を重要視している。そして時間軸でそれらがどのような

物語を話すか、空と小径の両側に伸びる植物をレイアウトしなければならない。そこに突然ヤマツツジの淡いピンクの花が登場するとどんなに素晴らしいか！

入所者の方々は、かつてこの島の山の中腹まで登って、そこにあずまやを建て、弁当や酒を友にヤマツツジを愛でていた。だが、今はそこまで登って行ける人はいない。ぼくはヤマツツジの移植を試みた。しかし島の人々に「ヤマツツジは下におろすと潮風に当たって枯れる、たとえ枯れなくても花は咲かない」と云われた。

春会期初日、幼児とあかちゃんを連れてお母さんが森の小径を歩いてる❣

もう色づいてる木ノ実もある。グミの一種だが食べるとモノスゴイ渋い！！

だが潮風に強い植物でまわりを囲んで三年目にはヤマツツジの花を咲かせることが出来た。しかし、まだ見上げるほどには成長していない。一方、実をつける木は増えてきた。植物の実りも人を勇気づけるのではないだろうか？

かつて、木々がまだちょろりとしか生えてなかったこの庭を手入れしているぼくに、島に通う美容師のＩさんが、「もう大勢の方々が遊びにみえてますよ！」と教えてくれた。この島で故郷に帰ることも許されず亡くなられた2000柱以上の入所者の魂がこの庭に来てくれているという。ぼくは霊的な事を信じるタイプの人間ではないが、そのように空想するのはある種の救いになったのだった。だが、ぼくは魂を慰めることよりも、今、生きて苦しんでいる方々の命を力づけたい。だから、ここは「魂の庭」ではなく「いのちの庭」と呼びたい。

編集後記

ウクライナに対するロシアの戦争は今後もより激化し、悲惨な状態が長く続くことが予想されます。平和に暮らしてきた市民への虐殺が現代の戦争でも行われる、ということが明らかになって来ました。許せるものではありません。

戦争が続く今、言うべきことではありませんが、「持続可能でより良い世界を目指す国際基準」であるSDGsが世界中で進められている時、この視点で戦争を見つめることも必要ではないかと思います。大勢の人が亡くなり、辛い思いをしている上に歴史のある都市や町が壊滅し環境も破壊されています。

戦争が終わったとしても瓦礫を撤去し、町やインフラを再構築していくという途方もない事業をしなくてはならないでしょう。

戦争が人と町と環境を破壊することを再度認識し、戦争を早く終わらせなくてはなりません。（大沢）